

分科会Ⅳ

10月17日（木）9：00～12：01／コスモスA

座長 有限会社ふあいん 代表取締役 小松 利光 氏

座長 株式会社如水舎 グループホーム雲水屋 施設長 多久和 泰子 氏

テーマ「GHケア・認知症ケア・自己決定支援・
重度化防止 等」

時間	演題 / 副題	所属	発表者 (都道府県)
9:00 }	介護拒否に対するケア ～何もなくていい。触るな。ほっといて～	グループホーム ユピテル三田	奥野 広子 (兵庫県)
9:14 }	その人らしい暮らしから学んだこと 日本版BPSDケアプログラムの取り組みからチームケアの在り方に気づいたこと	グループホーム大和	下山 明子 (熊本県)
9:28 }	復活の両下肢 ～チームケアの力～	グループホームほのほの	田畑 直子 (神奈川県)
9:42 }	心で支えるケアとは 入居者へあたたかいケアを	フロイデグループホーム桂	笹崎 圭太 (茨城県)
9:56 }	あの頃と変わらない毎日を 活気ある日々を継続する為の取り組み	グループホーム ジョイフル各務原	岩田 拓也 (岐阜県)
10:10 }	昭和の雰囲気溢れる中で笑顔いっぱい、活き活きと暮らし続ける	グループホーム ほのほの	野口恵津子 (三重県)
10:24 }	コロナと歩んだ5年間、穏やかな日常をとり戻せ！ A氏のBPSD改善に向けた取り組み	西広島グループホーム なごみの家	米倉 一真 (広島県)
10:38 }	筋力UP・稼働率UP 通年100%の稼働を維持できたことを振り返る	グループホーム 福住	高坂 潤 (新潟県)
10:52 }	夫婦が仲良く暮らす為に	グループホーム まんてん塩津	長谷 泰知 (滋賀県)
11:06 }	ヒヤリハット拾い上げからケアプラン反映 4年間の活動成果	グループホーム ジョイフル布袋	猿渡 寛美 (愛知県)
11:20 }	利用者と地域との交流 昔行っていた切り絵サークルにもう一度行けるようになるまで	グループホームこもれば家族・ 国分寺	菊地 純基 (東京都)
11:34 }	廃用症候群の予防における6分間歩行の成果	グループホーム はるや	井上 桃子 (岡山県)
11:48 }	よく見てくんなせ 安心した生活がおくれるために	グループホーム我が家	三富めぐみ (新潟県)
総 評			

介護拒否に対するケア

◆キーワード

- 1 認知症高齢者
- 2 介護拒否
- 3 ケアの統一

～何もしなくていい。触るな。ほっといて～

兵庫県・三田市

さんだ
グループホーム ユピテル三田

発表者名：介護福祉士・主任 奥野 広子

共同研究者名： 施設長：田辺 智子
管理者：三島 理恵

H15年8月開設3ユニット定員27名 共用型デイ・ショートステイ、定期巡回随時対応型訪問介護看護

理念に沿いながら介護の工夫に着眼し、介護と医療の連携を行いターミナルケアまで行っている。

(取り組んだ課題・はじめに)

令和4年2月に入居したA様 入居当時79歳 要介護2 A様は妻と実母(101歳)の3人暮らし。平成25年頃から認知症の症状が現れ、外出しても家に戻れない、家のあちらこちらに排泄をするなどが続き、自宅でA様の母親の介護も担っていた妻に介護破綻が来ていた。A様のグループホームの入居に合わせて、実母も緊急ショートを利用する、当法人の定期巡回随時対応型訪問介護看護で自宅の限界点をぎりぎりまで引き上げた経緯がある。また、妻は運営推進会議の構成員を引き受けて下さり、ご意見を頂くこともでき介護拒否の多い方だったがやりがいをもってケアができています。

(倫理的配慮)

個人が特定出来ないようプライバシーに配慮し、ご家族様に経緯を説明し同意を得ている

(具体的な取り組み)

A様 男性 81歳 アルツハイマー型認知症と血管性認知症の混合型の認知症と診断されており、認知症高齢者日常生活自立度IVである。

取り組み① 排泄

食事中以外は廊下を徘徊し排尿。少量の放尿の痕跡があちらこちらに残る。他者の部屋に勝手に入り排尿の行為もある。マンツーマンの対応にも限界がある。トイレの場所の認識がないことは分かっており、案内するも「やめろ!あ〜!」とかなりの大声を出しながら、スタッフの手を払いのける強い拒否がある。スタッフを交代して声をかけても効果がない。しかしスタッフの掃除の軽減を含め、廊下を歩き始めたら直ぐに手招きでトイレに案内すると、痕跡が減り効果的であった。言葉で刺激するより手招きは有効であった。

取り組み② 入浴

マンツーマンで対応すると、大声を出すだけでなくスタッフの手を掴む、突き飛ばすなどの暴力行為が出る。また、男性、女性スタッフであろうがうまくいかない。そこで、1人が声かけして話しながらもう1人のスタッフが衣類を脱がすことをした。2人で介入したことで注意が分散されるので、大きな拒否から小さな拒否へと変わる。入浴が少しスムーズになった。

取り組み③ 髭剃り

髭剃りは最も嫌な行為であるようで、ものすごい大声を出される。ただ、観察をしていると、空腹ではない昼食後の落ち着いたときに髭剃りを行うと成功率が高かった。朝の整容をしようとスタッフは、むきにならず、本人のタイミングに合わせ声かけの言葉を減らすことが重要であった。

(活動の成果と評価)

A様は言葉の理解が難しく、体を動かす時に恐怖心があるようだ。掴んだものを離さない時も多い。スタッフは一生懸命になる一方で、理解してもらいたいと言葉をはっきり話してしまう傾向にある。A様が理解できない言葉は、A様には不快なだけである。むしろ威圧的であっただろう。言葉数を減らし手振り身振りを使うことが有効である。また、さんざん手を尽くした挙句、新人の男性スタッフが舌足らずで自信なさげに話しかけると応じるといふ発見があった。

(今後の課題・考察・まとめ)

大声による拒否、暴力のあるA様だが、一日でも長く自立した生活が維持できるようにスタッフがA様の介護を拒否することがなく、観察と工夫を繰り返して、ベストな方法を確立したい。

その人らしい暮らしから学んだこと

◆キーワード

- 1 認知症をもつ人の満たされないニーズとは
- 2 認知症の人にとってのSOSサインとは
- 3 チームの信頼関係の築き方

日本版 BPSD ケアプログラムの取り組みからチームケアの在り方に気づいたこと

熊本県・熊本市

 ぐるーぷほーむ だいわ
 認知症共同生活介護 グループホーム大和

しもやまあきこ

発表者：介護支援専門員 下山明子

いいとみあきえ ごとう なな

共同研究者：飯富秋恵・後藤菜那

 社会福祉法人 熊本菊寿会グループホーム大和
 認知症共同生活介護

当ホームは熊本県熊本市北区に位置し、鳥のさえずりが響く自然豊かな住宅街にあります。認知症をもつ人がご家庭の延長として、その人らしく、地域の方々といつでも交流をもち、各々が自律した日常生活を過ごすことができる支援を行う共同生活住居となっています。

(取り組んだ課題・はじめに)

BPSD の予防・軽減に資するケアプログラムの取り組みを行ったことから、認知症をもつ人が、今何を思っているのか、何を感しているのか、また何を必要としているのか等を、評価メンバーで PDCA サイクルを実践し評価していきました。ケアに関わるチーム全員が統一したケアを実施することへの課題、そして認知症をもつ人本人が満たされない（目に見えない）ニーズをその人の視点にたって想像することの難しさ、そして繰り返し実践していったことから見えてきたチームケアの在り方。そして、チームスタッフ一人ひとりへの感謝など、気付いたことが多くありました。

(倫理的配慮)

上司と実習協力者に対して説明し、書面にて同意を得た。また、写真等示す場合はその趣旨説明と同意を得た。実習協力者の氏名、年齢等個人が特定される可能性がある情報は記号化した。

(具体的な取り組み)

2021年7月、BPSD の予防・軽減に資する認知症ケアモデル BPSD ケア体制づくりモデル研修にスタッフの1人がアドミニストレーター研修を受講し、日本版 BPSD ケアプログラムの取り組みを開始。

同月、BPSD とそのケア基本的な考え方、認知症チームケア推進の具体的な方法についてケアを行うチーム全員の勉強会を行い、BPSD の予防・軽減・再発防止を目指したケアの実践を4週間かけて実施し、毎月繰り返し、検討チームで BPSD+Q/BPSD25Q、ワークシートの記入、振り返り・プラン修正を実践しました。軽減していればそのケアを継続し、変化がなければ想定していたニーズが間違っていたとして新たに評価チームで検討し、PDCA サイクルを続けました。

(活動の成果と評価)

BPSD の多くは認知症をもつ人をその人個人の視点できちんと捉え考えると、その人の満たされないニーズを表情・仕草・声・言葉や行動等で表れたものに気づくことができました。BPSD はその人にとっての SOS サイン。健康状態や身体的ニーズ、環境などが影響していることがわかりました。そして BPSD をなくすことが目的ではなく、認知症の人の尊厳を保持したその人らしい暮らしの実現を目指すことの意味を、取り組んだチームメンバー全員がこの実践を振り返り、考え、仲間の個人の力を信頼し合い、日々ケアを行なえていることに気づきました。

(今後の課題・考察・まとめ)

入居者やケアスタッフのメンバーも変わり、認知症をもつ人を取り巻く環境が変わる時期は来ます。また新たな介護報酬改定に伴い、グループホームに求められるニーズはより重要化しています。これからも継続して実践できる環境を維持し、介護の質向上を深化するために、目前にきた人材不足難の打開策を考え、その時のケアチームで認知症をもつ人が尊厳を保持したその人らしい暮らしがおくれることを継続していくことが今後の課題です。

(参考・文献など)

参考資料

日本版 BPSD ケアプログラム「BPSD の予防・軽減を目的とした認知症ケアモデルテキスト 認知症介護研究・研修東京センター

社会福祉法人熊本菊寿会グループホーム大和 BPSD の予防・軽減に資するケアプログラム実践評価チームの実践資料

復活の両下肢

～チームケアの力～

◆キーワード

- 1 グループホームケア
- 2 重度化対応
- 3 家族支援

神奈川県・横浜市

にんちしょうたいおうがたきょうどうせいかつかいご

認知症対応型共同生活介護 グループホームほのぼの

かんりしゃ たばた なおこ

発表者：管理者 田畑 直子

すずき あきら

共同研究者：鈴木 彰

認知症対応型共同生活介護

平成 21 年 4 月 1 日開所

2 ユニット 定員 18 名

理念 利用者第一主義・地域密着主義・施設主体主義

(取り組んだ課題・はじめに)

両下肢壊死の可能性のある利用者様に対して、医療と連携しご家族と話し合い、介護職としてのチームケアにより回復まで至った経緯と結果を発表致します。

(倫理的配慮) 今回の取り組みに際しご家族より了承を得ております。

(具体的な取り組み)

A 様 90 歳 アルツハイマー型認知症。

平成 28 年 4 月 18 日、当ホームに入所。

昔は体操の先生だった事もあり、レクリエーションに積極的に参加されていた。責任感が強く人の役に立つ事に喜びを感じており、他利用者からも頼りにされていた。

令和 3 年 2 月、両下肢の炎症から始まり既往歴もあり、重症化し、更に認知症の進行に伴い、食事や排泄、意思疎通も難しくなり、動作する事も難しい為車椅子での全介助となる。羞恥心・自尊心は維持されており介護拒否も強く、職員に対して、日中問わず暴言や暴力行為(かみつく)などの行為がみられるようになり職員二人体制での支援の中、漏便行為も出現する。支援の難しい状況の中、ご自分で左下肢を掻きむしった事により表皮剥離が起り、その炎症部位を便で汚染された手で触れてしまったことにより両下肢の炎症が更に悪化がみられる。両下肢が浮腫み炎症部位からは滲出液が流れ足元に水たまりが出来る事もあった。

ご家族に相談、皮膚科受診。入院か毎日の通院を提案され、ご家族に相談すると、認知症もある為、病院での身体拘束は精神的に辛いと思うので、できるだけほのぼので生活してほしいと希望される。医療と連携をとり、患部の洗浄保護、弾性包帯での支援を実施。汚染された手で患部を触る事が課題となり、ご家族・職員・医療を含め、2 週間毎の話し合いとその結果をご家族への報告、同意を頂きながらの支援を継続となった。

(活動の成果と評価)

毎日の両下肢の洗浄・保護。両下肢の炎症部位への洗浄については 2 年間、課題についても家族同意のもと毎日実施を約半年間行う。この間もご家族の希望で食事はリビングで皆さんと楽しく食べてほしいとの意向を受け、毎日リビングで他利用者様と召し上がる。レクリエーションがある日も状態を見ながら参加。夏祭りなどもご家族と参加し笑顔が絶える事はなかった。

すぐに病院や入院とはせずに、介護士として出来る事をチームで話し合い、ご家族にも説明、同意の元、看護より指導を受け両下肢の洗浄と保護を実施した結果。現在はトラブルのない皮膚に回復。現在も車椅子ではあるが毎日リビングで食事を他利用者様と楽しみ、レクリエーションにも参加する姿有。

(考察・まとめ)

通常なら、入院となる事案ではあるが、ただご家族のホームで穏やかに暮らしてほしいという思いや、介護士が出来る支援への理解。職員の A 様の生活を支えていきたいという思い。その絆がそれぞれ、何が出来るのかを考え、A 様への両下肢改善の想いをひとつにし、医療は炎症部位へのアプローチ・介護は精神状態の安定・生活の支援。役割は違うが笑顔ある生活を第一に考え、チームとなり、生活を支え本人・ご家族様・職員全員の笑顔を見る事が出来た支援となった。

A 様の持ち前の明るさは健在で気分の良い日は、歌を聞かせてくれたり、楽しいお話を聞かせてくれている。この笑顔を一日でも長く皆と共有できるように、そして、A 様にとって素敵な人生と思って頂けるように、今後も、グループホームの役割として、認知症チームケアを全職員で考え、利用者様の生活を支えていきたい。

(今後の課題)

現在、A 様の炎症は改善したが、新たに両下肢の拘縮が出現している。再び、医療と介護、理学療法士、マッサージ、そしてご家族とチームを作り、新たな課題に取り組んでいる。

心で支えるケアとは

◆キーワード

- 1 認知症
- 2 笑顔
- 3 自由な選択

入居者へあたたかいケアを

茨城県 城里町

しゃかいふくしほうじんはくゆうかい
社会福祉法人博友会ふろいでぐるーぷほーむかつら
フロイデグループホーム桂かいごしょく ささぎ けいた
発表者：介護職 笹崎 圭太

地域密着型グループホーム桂では地域に貢献し地域の関りを大切にしている施設となっております。ご利用者様の安全を第一に考えている施設です。

(取り組んだ課題・はじめに)

グループホーム入所時は、笑顔で活気のある印象で生活をされていたが、グループホームでの生活が経つにつれ、笑顔が減り怒りっぽい事が多くなっていることに職員間で気づきどのようなケアがA様に適切で安心を与えられるのかを課題として取り上げさせて頂きました。

A様は以前、同グループの小規模多機能のサービスをご利用していた。小規模多機能での生活では普段は温厚で穏やかな生活をされていたとの事です。また、ご家族様の情報によると以前、生活をされていたご自宅でも地域との関わりを大切にされていたとお話がありました。ご結婚もされていたが早くして妻を亡くし独居での生活をされていましたが、妻を亡くされてから日々が経つにつれ地域との関りも減り、認知症の症状が見られるようになってきたとの事です。

(倫理的配慮)

今回の発表に際しましては、ご家族様の了承を得た上で、ケアの状況の報告や写真の掲載をしております

(具体的な取り組み)

1. A様がグループホームで安心して生活されていたのかを分析し、施設職員全体で以前どのような生活をされ、どのように安心を求めて生活をされていたのかを明確にし、A様が安らぎを求められるケアとは何なのかを考える。
2. 『言葉』以外でのコミュニケーション技法について調べ、職員間で実施しA様に最適なケアはないかを実践し職員間で共有し実践していく。
3. ユマニチュード『人間らしさを取り戻す』こちらの技法を用いり、A様が安心して生活ができているのかを職員全体で話し合いケアに繋げる。

(活動の成果と評価)

今回の課題として取り上げさせて頂きました

A様自身にどのようなケアを実施しましたら、不安が減り、施設内での生活で以前自宅で生活されていた環境に戻れるのかに着目し、問題を解決に近づけるようケアを実施致しました。まず、環境面から考えA様のご自宅となるべく近い環境づくりを実施し安心できる空間を考えました。環境づくりを実施した事によりA様の表情が穏やかになり、日頃の生活面で笑顔が多く見られるようになりました。以前では考えられなかった掃除を自発的に行うようになり環境を整えた事で少しずつ効果が見られるようになりました。

ケアの面ではA様自身の認知機能を維持できるようA様本人が望む事を施設職員で考え実践したことにより、A様のできることが少しずつ増えていく事が実感できA様の生きがいを職員全体でサポートしていく事で寄り添うケアに繋げる事ができました。今後も寄り添うケアを継続的に実施し、ユマニチュードケアの精神を忘れず実施していければと考えております。

(今後の課題・考察・まとめ)

今後の課題としましては、今回はA様を対象に個別ケアの見直しの方の実施し実践の方を行いました。やはり施設全体での個別ケアに対する意識づけが求まれてくるかと考えております。ですが施設職員も今回のケアを通した中で学びが大きく、少しずつではありますが今までのケアにプラスして利用者様の個々に対しての寄り添うというケアを意識されているのではないかと考えます。

個別ケアは奥が深く、認知症の方に対してのケアを私たちの物差しで測ることは難しいですが、表面的な笑顔が増えれば、私たち介護職はそれだけでケアをやってきたことに達成感を感じるかと思えます。

あの頃と変わらない毎日を

◆キーワード

- 1 得意な事
- 2 出来る事
- 3 その人らしさ

活気ある日々を継続する為の取り組み

かかみがはら

岐阜県・各務原市

グループホーム ジョイフル各務原

かいごしょく いわた たくや

発表者：介護職・岩田 拓也

しよくいんいちどう

共同研究者：グループホーム職員一同

自然と町の調和がとれた地域の中で安心とくつろぎを提供。特別養護老人ホーム、デイサービス、居宅支援事業所など事業所を併設している。

1 ユニット 9 名の事業所、開設は平成 15 年。
男女比は 2 : 7。平均年齢 81 歳。平均介護度 2. 2。

(取り組んだ課題・はじめに)

- ・利用者様が入所されてからテレビを見るだけの時間や椅子に座りぼーっとされている時間が多く見られる。事前情報では活動的な様子があったことからグループホームでもその人らしい生活や大事にしていた事を継続していく為はどうしたらいいかを考え、取り組みを開始する。
- ・ A 様 80 歳 アルツハイマー型認知症
要介護度 1 身体自立度 A1 認知症自立度 II α
- ・ B 様 78 歳 アルツハイマー型認知症
要介護度 1 身体自立度 A1 認知症自立度 II α

(倫理的配慮)

- ・今回取り組みを行うにあたり、利用者様とご家族に説明し同意を得た。また、全国グループホーム大会へ参加するため、写真や記録なども使用させていただきたい事を説明し、承諾をいただいた。

(具体的な取り組み)

- ・過去の生活歴を調べ直し、ご家族にも得意だった事や日課の確認を行い、情報収集を行う。
情報を整理し、グループホームでの生活においても可能な限り発揮できる場を設ける。
- 数独や散歩、掃除、調理の手伝い、机ふき、洗濯物たたみなどを中心に積極的に声かけを行い、活動を促していく。
特に散歩に行く事は共通して好きであり、在宅時の日課でもあった。グループホームでも散歩を日課とする。(午後に施設敷地内や近隣を 10~15 分程度の散歩。)
- ・ポイント制の導入を行う。活動を継続的に取り組めるように目標を作り、ポイントを貯める事で意欲の増進を促していく。

(利用者様の見える位置に掲示する)

- 1 つの活動を 1 ポイントとし、正の字で加算し、

50 ポイントで目標の実現とする。

ポイントについては自身で活動後にポイントを記入していただき、どのくらいポイントが溜まっているかを確認できるようにする。
目標の内容は喫茶店に行きたいや施設の近くにある伊木山という山に登りたいなど。

(活動の成果と評価)

- ・初めは職員からの促しによって行動されることが多かったが、3 週間程度で定着し利用者様達から率先して行われる様になった。
日課とした散歩も何時行けますか? などと職員に聞いてこられることも増えた。
- ・外で散歩が出来ない日や散歩の時間以外でも自発的にグループホーム内を散歩されるようになった。
- ・家事などに関しても利用者様より「何時でも手伝うよ」と声をかけられ事が増えた。また「目標があるから頑張れますよね」と利用者様同時が会話している声も聞く事ができた。
- ・利用者様が自己にて率先して動かれる頻度は増えたが、その分、転倒リスクの増加や一人で外に行こうとされる事、他の利用者様を誘い外に出ようとされる事も増えた為、離施設のリスクなども増加し、注意が必要となった。

(今後の課題・考察・まとめ)

- ・リスクが増えた事に対して対策を行い、事故予防やご家族との情報共有を行っていく。
- ・情報は常に更新し続け、得意な事、できる事に目を向けて取り組みを続けていただく。
- ・他の 7 名の利用者様の情報収集、整理も行い、それぞれの得意な事や日課なる事を発揮できる場を設けるように月に 1 度の会議を中心に検討して対応を進めていく。

昭和の雰囲気溢れる中で笑顔いっぱい、生き活きと暮らし続ける

◆キーワード

- 1
- 2
- 3

三重県・四日市市

ほのぼの
グループホーム ほのぼののぐち えつこ
発表者：野口 恵津子かとう ひでき
共同研究者：加藤 秀樹

GH ほのぼのは、四日市市内でも古い団地内の古民家を改修したホームです。昭和の雰囲気がそのまま残るホームで笑顔溢れる生活を送り続けていただく為に

職員が日頃取組んでいる事例を紹介します。

(取り組んだ課題・はじめに)

約2年程前に、他施設から我がホームグループホームほのぼのに来られました。

移ってきた当初は、落ち着きなく、常にホーム内を歩き回られ「ちょっとそこの家まで帰るでな、ここを出て、ちょっと歩いた所やで」と昼も、夜も出口を探されていました。表情も険しい顔つきをされ、笑顔をなかなか見せていただけない日々が続きました。(実際は歩いて帰れるような距離ではないのですが) また、そのような中で、他の方の居室内に無断で入られて、物を持ち出してしまったり、ご自分の意に沿ぐわないと、機嫌が悪くなり、場合によっては激しく拒否をされる場合があります、職員も対応に苦慮する場面がありました。

(倫理的配慮)

ご家族様に、ご本人の状態をお伝えして、少しでもたくさんの笑顔を見せていただきたい。ホームで楽しく暮らし続けていただけるように職員一同で取り組んでいきたい。

取り組みを説明して、今回の全国認知症グループホームの全国大会で取り組み事例として発表したいとの説明をして了解いただきました。

(具体的な取り組み)

日々観察をさせていただくと、幻覚症状が見られ、誰かと会話をする場面も見られ、レビー小体認知症で、日々の生活の中で突然気分が落ち込んで塞ぎ込んでしまう状態が見受けられました。

そんな中、ある日の早朝の朝食中に、突然食べ物をのどに詰まらせて、呼吸が困難な状態になり救急車で救急対応病院に搬送されました。幸い、救急対応で適切な処置をしていただき事なきを得てその日のうちにホームに戻られましたが、どうも様子がおかしい。あんなに歩き回っていたのに立つ事が出来ず歩く事が出来ない。立とうとすると激しく痛みを訴えられる状態になり、車椅子を使つての移動を強いられました。

当ホームは古民家を改修、耐震補強工事をしている為、車椅子を使つての移動は、ギリギリで厳しく、またご本人も車椅子からのトイレ介助、ベットへの

移乗等は、激し痛みを訴えられる為、1人介助は難しく、何とか2人でやっと思える状態の日々が続きました。

この間、施設では季節の行事(おやつレクや行事食、季節のイベントお花見等)を行ないましたが全員協力のもと、一緒に参加していただきました。

(活動の成果と評価)

日々の生活を、一緒に続ける中で、ご本人の体調の回復もあって、少しずつですが笑顔が増え、会話も自ら積極的に話し掛けるようになり、精神的に和らいだ雰囲気が多々見受けられるようになってきました。以前に比べると多くの笑顔が見られるようになり、心が和んだのではないかと感じています。

ここに来て、訪問看護ステーションさんとの連携態勢が整い、より長く住み続けていただける環境が整いつつあります。

(今後の課題・考察・まとめ)

今後については、看取りを視野に入れて、ご家族、主治医及び看護ステーションの協力のもと職員一同知識の習得と技術力向上を図って、最後までこのグループホームほのぼの笑顔が溢れる暮らしを続けて、人生の最後を迎えられるよう、体制を整えて、「ほのぼの最期を迎えたい」思ってもらえるよう日々取り組んでいきます。

(参考・文献など)

コロナと歩んだ5年間、穏やかな日常をとり戻せ！

◆キーワード

- 1 認知症ケア
- 2 コロナ禍の制限
- 3 苦しみに寄り添う

A 氏の BPSD 改善に向けた取り組み

広島県・広島市

いりょうほうじんわどうかい にしひろしま

医療法人 和同会 西広島グループホーム なごみの家

いえ

よねくら かずま

発表者：介護福祉士 米倉 一真

平成 14 年 12 月開設 2 ユニット
 広島パークヒル病院併設のグループホーム
 医療(病院・ホスピス)福祉(老健・デイケア)複合施設

屋上に小さな畑があり、花屋野菜を育てている また、その日の天候や体調に合わせた屋上への散歩で、「外気に触れる」を支援している

(取り組んだ課題・はじめに)

2020 年 6 月、A 氏は自宅より入居される。83 歳(当時)の男性で要介護 1、長谷川式簡易知能評価スケール(以降長谷川式スケール)は 20 点、記憶障害はあるが ADL は概ね自立していた。コロナの緊急事態制限が全国的に緩和され始めた頃であり、家族は週に 1 度面会に来られ、大好きな囲碁をボランティアの方と楽しまれていた。しかし入居から 1 年後、国内のコロナ感染者数は 100 万人を超え、当施設も面会や外出が原則禁止となった。A 氏もこの頃から「現金がない」「通帳がない」と訴えるようになり、興奮し自身の頭を叩いたり声を荒げる事もあるため、他入居者から「怖い」という声もきかれるようになった。今回は、A 氏の不安や興奮の改善・緩和を目的に行った対応・ケアについて報告したい。

(倫理的配慮)

家族に説明し書面にて同意を頂き、当法人の倫理委員会において承認を得た

(具体的な取り組み)

2021 年、A 氏は要介護 2 と判定された。長谷川式スケールは 15 点となり、特に「短期記憶」に関する点数が低かった。「記憶障害」には、当人が必要としている情報を繰り返し視覚より取り入れることが効果的といわれている。そこで、「当施設は、現金等貴重品は持ち込めません」「売店では現金なしで買い物出来ます」という内容を、居室の目立つ位置に大きな文字で掲示した。また、居室で孤立しないようスタッフとの関わりを増やす事を目的に、①食後居室へコーヒーを持って行き、ひと言声をかける ②軽作業を他入居者やスタッフと一緒にやる ③売店で買い物をして頂く ④屋上に散歩に行く 等のプランをたて実施した。

2022 年、施設の面会制限も続いていた。A 氏の「現金がない」という訴えに対しては繰り返し説明していたが、「何故自分のお金を自分で持てないのか」と興奮されることも多かった。また、施設内でコロナ感染者が発生した為外部へ出る事ができなくなり、売店や屋上への外出は中止した。長谷川式スケールは 13 点で、「短期記憶」と、特に「見当識」の点数

が極めて低かった。そこで、課題解決の為に再度アセスメントしスタッフ間で話し合った。すると、一日の殆どを居室で過ごされており、不安の訴えは食堂でのレクリエーションや軽作業中はみられず、居室から出て来た後に多く、「食後にコーヒーを持っていく」などスタッフが 1 日数回しか A 氏へ関わっていなかった為、プランを見直し「見当識障害へのサポートとスタッフの確実な関わり」を目的に、「今 11 時 45 分です、もうすぐお昼ご飯ですね」のように、現在の時間とこれからの予定などを伝える声かけをプランに追加し実践していった。

(活動の成果と評価)

A 氏は、居室で険しい顔で探し物をしていることが多かったが、声をかける事で表情が和らいだ。また、「お金がない」などの訴えが減り、あったとしても説明すると容易に納得され、大きく興奮される事が少なくなった。さらに長谷川式スケールは 19 点と、場所や日時の見当識、短期記憶の点数が上がっていた。今回、「部屋で一人考え込む前に、不安が早い段階で解消されると、大きな混乱(興奮)に繋がらない可能性がある」という事が分かった。また、中核症状を日常的にサポートした事で、不安や興奮といった BPSD を緩和できたと考える。

(今後の課題・考察・まとめ)

2023 年、コロナに対する様々な措置や制限が緩和され、5 類への移行が決定した。この頃、A 氏は「Y さんはいるか」と特定の男性職員を探すようになった。当施設では 1 ユニット 9 名の入居者のうち男性は A 氏一人であり、職員も男性の割合が少ないため入浴の際は異性介助を行っていたが、A 氏の羞恥心に配慮し出来る限り同性での介助を行うようにした。

2024 年現在、施設の制限も大幅に緩和され、面会や一部の外出も可能となった。これから、家族や地域の方の協力も得ながら、A 氏の穏やかな日常を取り戻していきたい。また、この先いつ大規模な感染症が発生するか分からない。この 5 年間の経験を活かし、制限された空間の中でも認知症の進行や変化に合わせ、本人の苦しみや思いに寄り添って、楽しく穏やかに過ごせる工夫を考え実践していきたい。

◆キーワード

- 1 下肢筋力
- 2 楽しみ
- 3 やりがい

通年 100%の稼働を維持できたことを振り返る

新潟県・長岡市

グループホーム 福住

ふくずみ

発表者： 介護職員 高坂 潤

たかさか じゅん

共同研究者： 境 須磨子

さかい すまこ

社会福祉法人長岡三古老人福祉会
「コンパクトシティ桜ガーデンプレイス福住」内にあるグループホームである。
施設内には有料老人ホーム、特別養護老人ホーム、企業内保育苑がある。
2ユニット 定員 18名 平均介護度 2.61
平均年齢 86歳

桜ガーデンプレイス福住は

「福が住む街づくり」として地域ケアの拠点となるべく複合型施設として平成 21 年 7 月に開設し、「常に感謝の気持ち」「謙虚な姿勢」「笑顔で挨拶を」をスローガンに掲げ取り組んでいる。
また、グループホームでは理念である「ご利用者がここに居て楽しいと思える生活と地域と支え支えられる関係を大切にすること」を目指し取り組んでいる。

(取り組んだ課題・はじめに)

グループホーム福住では令和 2 年度まで転倒による骨折から ADL の低下や機能訓練が必要となり特別養護老人ホームまたは老人保健施設へ移られる方が続いた。その状況から、転倒骨折によりご利用者の生活が一変することを理解はしているが、その転倒に対する事象の対策に留まっていた。そのため転倒に対する対策だけではなく、ご利用者の筋力アップが必要ではないかと考え取り組んだ内容を報告する。

(倫理的配慮)

今回の発表にあたり、日本認知症グループホーム協会全国大会で発表することを説明し、写真の掲載についてご家族・ご利用者には書面にて同意を頂く。職員にも取り組み内容について説明し同意を得た。

(具体的な取り組み)

- ① 平成 31 年（令和元年）4 月～令和 5 年 3 月までに転倒された件数と入院者数、入居者数、退居者数の統計。
- ② ①の統計から転倒による骨折で住み替えをされた方をピックアップし検証する。
- ③ 上記の内容からグループホーム会議にて話し合いを行った。令和 2 年以降新型コロナウイルスが流行し、制限された生活を送ることとなる。外出を控え、ご家族や知人との交流や対面面会も制限するなど、外部との関わりが遮断され活動性の低下が明らかになった。それゆえ身体機能維持を目的として、特に下肢筋力の維持を目指し、様々な体操を取り入れた。以前から実施していたラジオ体操や北国の春体操に加え、歌える体操、足を使った運動、ごぼう先生のイス体操などを実施した。何よりも楽しんで参加できるものでなければ意味がないと考えた。重度の認知症から体操に興味を示されない方や体操に参加されない方には個別にプランを検討し、バルコ

ニーや敷地内に咲いている花の鑑賞や外気浴をしながら散歩したり、隣ユニットへ散歩したり、歓談する等、楽しみながら運動できるように工夫した。

(活動の成果と評価)

多くの体操を取り入れることでご利用者は興味を持たれ、日常生活の日課として継続することができた。「運動を頑張ろう」と意識を持ち体操に参加されている。「楽しみ」や「やりがい」も感じている。更に「体操をやきましょう」とご利用者の声も聞かれ、積極的に参加される方が増えていった。タオルを持って参加される方もいた。実際にご利用者の転倒の件数は対策を講じても減少してはなかったが、骨折入院する方は令和 4 年度以降ゼロとなった。転倒等の事故から入院に至らなかったことご利用者の今までの生活を維持することができた。令和 5 年度も入院に至る事故は無く、毎月 100%の稼働を維持し通年 100%を達成した。

(今後の課題・考察・まとめ)

今回、ご利用者が興味を持って行える体操を取り入れたり、個別の活動をしたりすることで目に見える成果として現れていると実感している。これらの活動は下肢筋力の維持または低下を緩やかにしただけでなく、認知機能の低下も緩やかにすることにも繋がったと考えている。今後もご利用者の思いを汲むケアを大切にし、『ここに居て楽しいと思えるグループホーム』にできるように取り組んでいきたい。

(参考・文献など)

- ・ごぼう先生といっしょ！毎日 10 分健康イス体操 DVD 2017 年 7 月 14 日 KINGRECORDS
- ・学研介護レクシリーズ 歌える体操レクリエーション 発行 GAKKEN 著者 野崎健介(監修)

夫婦が仲良く暮らす為に

◆キーワード

- 1 職員の思い込み
- 2 夫婦の関係性
- 3 本人の思い

滋賀県・長浜市

グループホーム まんてん塩津 しおつ発表者：長谷 泰知 はせ たいち共同研究者：藤田 豊久 伊藤 さつき ふじた とよひさ いたう認知症対応型共同生活介護 平成17年4月1日開所
平成24年6月増設 2ユニット 定員18名運営理念：のんびり ゆったり ほがらかに。
いつまでも自分らしい生活のお手伝い。

(取り組んだ課題・はじめに)

入居前の情報や家族の意向をケアに反映した結果、ご本人の思いや行動に対するアセスメントを十分行わずに先入観でケアを行っていた。当時の取り組みや考え方、後にチームでケア内容を振り返り気付いた反省すべき点について報告する。

(対象者紹介※夫婦) Aさん 男性 97歳 要介護1 A2 IIIa 老年期認知症 以下、夫と呼称する

Bさん 女性 98歳 要介護1 A2 IIa アルツハイマー型認知症 以下、妻と呼称する

入居前面談の時、家族から「以前から夫婦喧嘩が多く、父が手を出す事も有った。二人一緒に入居を希望するが、会わないようにしてほしい」と希望された。実際に夫婦と面会すると、夫は気難しく妻はおとなしい印象。偶然、別々のユニットに空きが有った為、夫婦離れて入居となる。

入居後は、夫が妻を探して歩き回り、職員に対して強い言動や詰め寄る姿も有り、外へ出て行ってしまう事も多く有った。また、表情は常に陰しくコミュニケーションを取る事も難しい状態。妻も、夫の同行を心配しており、不安を訴える事が多く有った。夫婦別々の生活を続けたが、夫の行動はエスカレートし、妻の不安も解消されず、事故やトラブルの危険性も有る為、不安と焦燥感を解消するための取り組みを行った。

(倫理的配慮)

本人・家族・責任者からの承諾は得ている

(具体的な取り組み)

①妻が居ない事に対する焦燥性興奮や職員への強い言動や詰め寄る姿の要因を探る

②畑仕事を生きがいにしていた夫に家庭菜園を担当してもらう

③妻が夫の事をどう思っているのかを探る

(活動の成果と評価)

①日々の記録や職員、家族から情報を集め、性格と認知症どちらの要因が強いのかを話し合った。

家族からは、認知症の症状が出てから執着心が強くなったと情報を得た。職員からは、朝は笑顔でも妻が気になり始めると周りが見えなくなる、短期記憶障害により一度納得してもすぐに記憶が失われ、興奮状態になると情報有り。性格よりも、認知症による影響が強く出ているという結論に至る。

②初めは興味を持つ事も無かったが、職員が畑仕事の話をしたり道具を準備していると、徐々に興味を持って参加されるようになる。しかし、30分ほど作業すると、「嫁を探してくるわ」と離れてしまい、妻が居ない事への不安を根本的に解決する事は出来なかった。

③妻も夫が居ない事への不安を口にする事は有ったが、家事を一緒にする事で気が紛れる事が多かった。夫の話を知ると、「真面目で怒る事も有ったけど、優しい所も有る」「家事は出来ない人だけど、他の事は頼りにしていた」と返答有り。何度か尋ねても同じ答えが返ってくる事からも、夫を大切にしていた事に気付く事が出来た。

上記の結果を得て再度家族と話し合い、夫婦がお互いを求めている事や現在の姿を伝え、安全に配慮するので夫婦会う時間を作りたいと説明。実際に会うと夫婦共に喜んでおられ、夫婦水入らずの時間を過ごす事が出来た。家族に伝えると家族は非常に驚いており、面会の際に二人の姿を見て喜んでいた。

(今後の課題・考察・まとめ)

二人が会えない環境を作ってしまったのは、家族の思いを無視してしまう事や二人が出会いトラブルになる事を恐れ、ご本人の思いに向き合っていなかった事が原因である。ご利用者は毎日大切な1日を過ごしている。今回の事例のように、例え家族が望んでいる事が有ってもご本人の望む生活が叶えられるようにする事が、私達に求められるスキルで有り義務で有る事を再度自覚し結果を出す事で、ご本人・家族共に満足出来るような支援方法を考え実行していきたい。

(参考・文献など)

ヒヤリハット拾い上げからケアプラン反映

◆キーワード

- 1 共有と分析
- 2 習慣と好み
- 3 出来ることに着目

4年間の活動成果

愛知県・江南市

グループホーム ジョイフル布袋^{ほてい}

発表者：介護職 さわたり ひろみ 猿渡 寛美

共同研究者：グループホーム職員一同

特養、ショートステイ、デイサービス、居宅介護支援事業所を併設し、在宅から入所までトータルサポートする地域の拠点。

1ユニット9名の事業所、開設は2002年4月

(取り組んだ課題・はじめに)

2021年からヒヤリハットを積極的に拾い、病院受診を伴う事故防止に努めてきた。取り組みを継続した結果、2022年9月から病院受診を伴う事故は発生していない。ヒヤリハットを拾い、対策を実施、評価、ケアプランに反映するまで一連の流れについて、A様の事例を通して報告させて頂く。

(倫理的配慮)

利用者様本人及びそのご家族に発表の趣旨を説明し、同意を得た。

(具体的な取り組み)

事例紹介

A様/82歳女性/2023年4月入所/要介護1/身体自立度A2/認知症自立度IV/アルツハイマー型認知症/高血圧症/睡眠障害/他人のことが心配な性格

A様のヒヤリハット件数(2023年4月～9月)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	計
13	29	25	22	15	12	116

2023年4月～9月ヒヤリハット総件数の25%に該当

①ヒヤリハットを拾う取り組み

○ヒヤリハットを積極的に拾う

→「出勤時にヒヤリハットを必ず1件拾う」をルール化する。内容は問わない。

○ヒヤリハットの共有

→記録と申し送りでヒヤリハットの内容と対策を共有する。

○ヒヤリハットの集計と分析

→利用者様ごとに種別、件数を集計し分析を行う。

②要因と対策

A様のヒヤリハットを分析すると他利用者様と比較してトラブルが多く挙がっている。トラブルの内容をさらに分析すると「睡眠障害による早朝覚醒がみられ他利用者様を起こしてしまう」「他利用者様のことが心配になり話しかけるが途中でどこかに行ってしまう」の2つが挙がる。

それぞれについて要因を分析し、対策を立てる。

○睡眠障害

→コロナ感染症後に睡眠障害がみられた。

体内時計を整える為、起床後日の光を浴びて頂く/体を動かすことを増やす/就寝時間の統一/就寝時の居室の明るさを統一する

上記の対策を実施すると同時に記録を詳細に残し、主治医に報告し、指示を仰ぎ、不眠症治療薬が処方となる。対策実施3ヶ月後から効果が徐々にみられ、早朝覚醒は改善される。

○他利用者様のことが心配になり声をかけるが途中でどこかに行ってしまう。

→家事、体操が苦手。他利用者様と関わりたいが上手くいかない→楽しみと役割がない→役に立ちたい・困っている人を助けたい→他利用者様のことが心配になり声をかける→どうしたらいいかわからなくなる→その場を離れる。

習慣や好みをアセスメントし、楽しみや出来ることに着目する。習慣や好みについて家族から聞き取りを実施する。家事が苦手でも少しでも出来ることに着目する。

楽しみ：ドラマ観賞、歌

役割：家事の内容と量を限定する。

楽しみや役割を担って頂くことを増やしていく。

楽しみと役割が増えたことで他利用者様との関係性を構築することができた。

(活動の成果と評価)

A様のトラブルに関するヒヤリハット件数

対策実施前	対策実施後
30件	25件

対策実施前と実施後ではトラブルに関するヒヤリハットが5件減少した。

対策をケアプランに反映し、定期的に評価する。

(今後の課題・考察・まとめ)

ヒヤリハットは拾うだけでは意味がない。ヒヤリハットを分析、対策の実施、評価することが重要である。ヒヤリハットを課題から考えるのではなく、利用者様の習慣や好みから何が出来るかを考えていきたい。

◆キーワード

- 1 パーソンセンタードケア
- 2 認知症ケア
- 3 フレイル予防

昔行っていた切り絵サークルにもう一度行けるようになるまで

こもれび かぞく・こくぶんじ

東京都・国分寺市

グループホームこもれび家族・国分寺

きくち じゅんき

発表者：菊地 純基

あべ しんや

共同研究者：阿部 真也

株式会社佐藤総研が運営している認知症対応型共同生活介護の施設になります。

株式会社佐藤総研は認知症対応型共同生活介護施設、居宅介護支援事業所、サービス付き高齢者住宅、地域密着型通所介護、訪問介護、定期巡回随時対応型合訪問介護を運営している会社になります。

(取り組んだ課題・はじめに)

今回私たちは、入居された利用者様が、今まで大切にしてきた地域住民とのつながりを入居された後も失わず、出来るだけ以前のように交流が続けられるようにするために私たちが手助けできることは何かを考え、それを実現に移せるような取り組みを行ないました。

(倫理的配慮)

今回の分科会への発表を行うにあたり、事前に本人、家族に説明を行ない、同意を得ております。

(具体的な取り組み)

まず、利用者様に何かやってみたいことはあるかを聞くと「そうねえ、ここに来る前に〇〇さんと一緒に行っていた切り絵のサークルに行きたいわねえ」という本人の希望を聴取しました。その後利用者様がもともと通っていた地域センターでの、切手を使った切り絵の会合に参加するにはどうしたらいいか、運営推進会議の際に本人をよく知る民生委員の方にお話をし、切り絵サークルの責任者の方に話を通していただきました。それにより切り絵サークルの開催日程を把握し、そこに職員同行のもと参加できるよう個別支援計画を作成し、職員間で共有しました。また、切り絵サークルに利用する地域センターの部屋によっては車イスが使用できない可能性があるため、毎日の歩行訓練などを続けることで、下肢筋力や杖を使つての歩行機能を維持していきました。

(活動の成果と評価)

当日は天気も良く、施設から歩いて5分程度の距離の地域センターまでは職員による車イス介助によって滞りなくたどり着くことができました。切り絵サークルの会合に到着すると「あらー〇〇さ

ん」と知人との再会を喜んでいました。

2時間の切り絵サークルの会合でしたが、知人との会話が弾みすぎて作業の手がしばしば止まる様子も見られました。

会合が終わった後の帰路に着く際には、今回の集まりに参加できたことに大変満足している様子が見られました。

「今度はあそこでやってた太極拳にもまた参加してみたいわね」と嬉しそうに話していました。

今回の取り組みでは、利用者がかつて培ってきた社会とのつながりを大切にし、施設に入所してもそういった集まりに参加し、知人との再会を楽しむ事で、利用者自身の笑顔と満足感を引き出すことに成功しました。

(今後の課題・考察・まとめ)

本人は現在杖を使つての歩行ですが、太極拳に参加することは可能か、また、太極拳に参加するにはどういった支援が必要になってくるか、職員間で話し合いを行ないたいと思います。

今回の取り組みの結果、施設の中だけの生活では見られないであろう利用者様の一面や表情、他者との交流などの様子を知ることができました。

また、他の利用者様に関してもその人の生活背景などを参考にしながら、個別に行うことができる支援を計画し、順次実行に移していこうと考えています

(参考・文献など)

◆キーワード

- 1 自立支援
- 2 多職種連携
- 3 6分間歩行

岡山県・玉野市

かぶしきかいしゃ

株式会社アール・ケア グループホーム はるや

共同研究者：事業部長 鈴木 茂和
 所長 立花 圭
 理学療法士 岩下 修
 三原 秀斗
 はるや ユニットスタッフ一同

いのうえ ももこ

発表者：井上 桃子

(株)アール・ケア グループホームはるや 平成14年3月に開設。平成24年3月施設老朽化により移設。2ユニット18名。

理念【幸福に生き、幸福に暮らし、そして幸福な人生を…】

(取り組んだ課題・はじめに)

A様は、R6.2月に当施設に入居された。入居後すぐにCOVID-19に罹患。血中酸素飽和濃度が低いことから1週間の入院となる。

入院中ベッド上での生活だったこともあり、下肢筋力が低下していた。退院後、歩行は問題なく行っていたが、段々と自立歩行が困難になり、手引き歩行介助が必要となる。ご家族と心療内科に定期受診した際に、心療内科医よりリハビリ入院を勧められたことを受け、本人の「自分で歩きたい。出来ることは自分でしたい」という思いやご家族の意向を主治医に伝え、COVID-19による廃用症候群との診断を受け、2週間の訪問リハビリに入っていたいただき、集中的に歩行訓練を行う運びとなった。また歩行状態と下肢筋力を維持するために、介護職員でも出来るリハビリテーションを指導して頂き、継続してリハビリが行える環境を作り、取り組んだ結果を報告する。

【本人紹介】

A様。94歳、女性。要介護度1。アルツハイマー型認知症。性格は明るくて完璧主義。腰・両膝痛がある。入居前に帯状疱疹になり、完治していないことから入居後より内服と外用薬にて治療中。

(倫理的配慮)

今回の発表にあたり、関係者各位に了承を得ている。

(具体的な取り組み)

今回の取り組みとしては、入院時のベッド上での生活に加え、帯状疱疹の内服薬を飲み始めてから、歩行不安定になっていることを主治医に相談、帯状疱疹の内服薬を中止の指示を受けた。R6.3月18日から2週間、訪問リハビリによる歩行訓練と下肢筋力維持のリハビリを受けて頂いた。本人とご家族の希望で屋外を自立歩行したいとのことで、歩行訓練時屋外での6分間歩行(高齢者の持久力を評価するテスト)を実施した。最初は息が上がり、間欠性跛行が多かったが、8日目より6分間で約160m先の公園ま

で腕を支える程度の介助で歩くことが出来た。腰の痛みの訴えも少なく、自力歩行が安定して行っていた。

訪問リハビリ期間を終え、理学療法士より指導を受けたリハビリを午前・午後と行う。毎日屋外に出ることは難しいので施設内(1周64.1m)で6分間歩行を行っていたが、6分間しっかりと歩行できる日は少なかった。リハビリに加えて、下肢の自主訓練とラジオ体操も行った。4月28日より帯状疱疹の痛みが増強し、内服治療が再開となったが、帯状疱疹の痛みや腰の痛みの訴えは継続していた。6分間歩行実施の際、手をつなぐなどの軽介助が必要なこともあり、歩行の安定性は欠いていたが、実施そのものについては、拒否なく行っており、日常生活でも自力歩行が出来ていた。5月下旬より腰の痛みが強く、立ち上がりが困難、手引き歩行が必要になったため、6分間歩行中止。理学療法士に相談し、腰に負担のかからないベッド上でのリハビリに変更。変更後も腰の痛みがあり、リハビリが出来ないこともあったが1週間程で痛みが緩解し、普段の移動も自力歩行が可能になった。6月中旬より6分間歩行を再開。腰の痛みや歩行時につまづくことや、途中で中止することは多いが、日常的には自力歩行が出来ている。

(活動の成果と評価)

6分間歩行が途中までしか出来なくても、下肢筋力維持のリハビリは日々行っていたので、筋力維持に繋がり、自力歩行が日常生活には支障なく行えていると考える。

(今後の課題・考察・まとめ)

帯状疱疹や腰の痛みについては、引き続き主治医と連携を取りながら対応していく。その中で継続したリハビリの実施を行い、自力での歩行からA様の望む自立した歩行に繋げていきたい。

よく見てくんなせ

◆キーワード

- 1 環境の変化
- 2 こだわり
- 3 その人らしさ

安心した生活がおくれるために

新潟県・燕市

しゃかいふくしほうじん さくらのさとふくしかい

わがや

社会福祉法人 桜井の里福祉会 グループホーム我が家

発表者：介護職員 三富めぐみ

みとみ

共同研究者： 職員一同

しょくいんちどう

新潟県燕市に平成17年6月、平屋1戸建て2ユニット。定員18名で開設し、共同型デイサービスも行っていました。今年の6月で19年目を迎える事ができました。

「もうひとつの我が家づくり」を運営理念に住み慣れた地域を大切に、やすらぎと落ち着ける居心地の良い我が家づくりを目指して支援しております。

(はじめに・取り組んだ課題)

<事例紹介>

入居者A様 女性・94歳 要介護2 レビー小体型認知症

同市から嫁ぎ、農業の傍ら工場勤めもしながら3人の子供を育てられた。夫が亡くなり同居していた長男が身の回りの世話をしてくれていたが病気にて他界。その後は家を出ていた次男が戻り世話をしてくれた。市外に嫁いだ長女も週1回の受診の付き添い等、協力をしていたが、亡くなった長男と次男を比べ、次男は何もしてくれないと次男に対して攻撃的な言葉と態度をとるようになった。在宅生活が困難となり、令和6年1月23日に当事業所へ入居となる。こだわりも多いA様に職員はどうしていいか模索している中での取り組みを紹介する。

<倫理的配慮>

・今回の発表に関する資料・写真などについては、ご本人及び、ご家族に了承を得て行っている。

<具体的な取り組み>

入居当初から、環境の変化から眠れず1時間おきに排泄に対する訴えが聞かれていた。

夜間は1時間おきに起きて職員を呼びトイレや服の着方を直すのを見てほしいと訴えていた。A様を分かりたい、どうやったら過ごしやすくなるのか、在宅時の生活環境について長女から話を聞き「本人が納得しないと何をしても駄目。」と、長女とすり合わせていったが、A様からは排泄の訴えが多く聞かれた。漏れないようにしたい為だと職員は思い、大きめのパットを考えたがA様は納得されてない様子で「またがき直してくんなせ。」と、より訴えが強くなった。またがきとは方言である。職員はこだわりが強いただけと思っていた。A様が納得できないと苛立ちが収まらない様子に、どうしてここまでこだわるのか、職員はわからなかった。家族からの情報も理解し、整理できていると思っていたが、十分でなく再度長女に細めに連絡をすると「布団の掛け方も包み込むようにベッド柵に入れ込むようにしないと安心できない、寝る時に布団を優しく叩きながら離れると安心する。服も着方があり、お尻下までかく

れないと安心しない。」等を教えて貰った。その情報を職員が共有しケアに取り組んだ事により、少しずつ納得が得られるようになった。入居当初より男性職員に対して「頼りになんね。」と、厳しい言葉を向ける事も多かった。主治医からも情報を頂き「この人は認知症だけじゃなくて病気だから。」と、アドバイスを頂いた。また、「長男は優しい人で献身的に面倒をよく見ていた。」と、長男の事についても情報を頂いた。眠れない原因は漏れて次男に怒られるのではないかという不安からだと言われ職員は考え、パットのサイズを変更した。しかし、その直後から訴えが多くなり、男性職員に対して厳しい言葉を向け始めた。4月は職員の異動もあり男性職員が2人から3人へ増え、自分で出来ないと言われ怒られるという思いこみも強くなり、男性職員に対しての不安感は続いている。その中で、タイミングが合い居室を共同スペースに近いお部屋に移動した。

<活動の成果と評価>

A様の不快感を減らすため排泄ケアを見直した。1時間おきにトイレに起きていたのが、3時間おきになり眠れるようになった。男性職員に対して厳しい言葉を向けるのは、「長男はよくしてくれたのに次男はしてくれない、次男は怒ってばっからだった。」という言葉から、在宅時の生活環境を思い出されて男性職員に対しても次男と重ねて見ている事からだった。居室を移動した事で、職員が側にいる、いつでも来てくれるという安心感からお部屋で自分の時間をゆっくり過ごす事も増えてきた。今回の取り組みを通して、A様が在宅で頼りにしていた長男が亡くなり、環境が変わった中でどれだけ苦労してきたか。家族、主治医の話聞き、人となりを知ることが出来た。しかし、今の生活全ては受け入れられてない。

<今後の課題・考察・まとめ>

認知症という捉え方だけではなく、今まで培ってきた生活環境と慣れた生活やこだわりを、共同生活の中でどう整理していくか。些細な事でもアセスメントを行い、ケアの統一性が必要だと再認識した。これからもA様と一緒にその人らしさを大切に日々を歩んでいきたい。